

## 書 評

### 川島典子編著『人口減少社会の地域経営政策』晃洋書房

遠藤哲哉（青森公立大学）

本書は、本格的に人口減少社会に突入し、大きな社会構造の変革期にある日本社会において、地域経営の視点から社会課題を分析する視点を理論、政策、実践面から多角的に取りまとめた、優れた研究書であると評価できる。

第1章から第4章までは総論であり、第5章から第8章までは各論となっている。そして、第9章から第11章までは、事例を取り上げている。総論では、地域経営と公共政策、経営組織論、地方自治、社会的企業・NPOとの関係を明らかにしている。ここでは、地域経営においてウェートが高い地方政府との関係で、ガバナンス、ネットワーク、組織間関係、全体戦略、社会的企業・NPOについて、従来の研究知見を踏まえつつ、わかりやすくて確かな議論が展開されている。各論では、保健医療、社会福祉、外国人労働、情報学の各方面において地域経営の視点からする研究と実践の重要性を取り上げている。後半の事例では、文化・観光政策、まちづくり、地域経済における実践についてまとめている。

渦中にある未曾有の人口減少とAI、IoTやSociety5.0などという言葉が示唆する第4次産業革命、そしてポスト・コロナという変革期において、従来のガバメント体制の問題を克服し、新しいコンセプトと実践で、地域社会を再編成していく必要がある。この間、日本においては、本書で言及されている諸分野での地域政策及び地方創生政策が展開されてきたが、十分な課題解決には至っていない。本書では、地域社会を構成している諸主体によるガバナンス、組織間ネットワーク、「柔かい組織」マネジメントや戦略、ソーシャル・キャピタルの構築等への観点をベースに、独自の視点から理論、実践面を深化させていると評価でき、今後の「地域経営」学展開に大きな弾みをもたらす研究業績である。

本書は、研究書としてのみならず、本文の紹介でもあるように、学部学生や大学院の教科書としてまた、一般の市民の方々に広く読んで欲しい一冊である。